
魔法少女リリカルなのは～オリ主は中途半端にチートな魔導師？～

東風の遁走者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜オリ主は中途半端にチートな魔導師？〜

【Nコード】

N8335N

【作者名】

東風の遁走者

【あらすじ】

コレは魔砲少女リリカルなのはの二次創作です。作者は創作に関しては全くの素人で他の作者様の作品を見て参考にしながら書ける有様です。多分チートになります、徹底的ではないけどチートになるのは確実です。それでもよろしければこの駄文とすらいえない字の塊をお楽しみになってくれれば幸いです。

アドバイスや感想、批判など対応しきれないと思いますが待っています

これは作者の妄想の掃き溜めであってここが他の作品とは違うぞ

！！とかいう意気込みは全くありません、そういうものを望む場合は他の長期間連載が続いている作品を読むことをお勧めします

設定（前書き）

こちらはネタバレになるものがある可能性があります、注意してお読み下さい。

設定

キャラクター（主人公）：樹廻匠きめぐりたくみ

本作のオリジナル主人公。

本来はチート性能の予定が全体的にリミッターを掛けられていて魔導師として最低限の資質と平均より少し上程度の体力・筋力・速度に抑えられているので異常な性質は希少資質のみの状態になっている。

推定陸戦Cランクの魔導師の素養しか発現できていないが本来は空戦Sランク以上の資質がある。

リンカーコア接続によって他人の資質を模倣したり回復力を高めたりすることが出来る。

が、一定距離以内でないと接続できない上にその状態で魔法を使えば両方ともに消費するのでこの方法で意味をなすのはせいぜい同じ魔法の制御を分担できることぐらい、ランクCの主人公ではそれすらも同じ魔法を持つ二人組みが同時に放つほうが効率が良いという便利に見えて全然便利じゃない能力。

この資質の真価は『リンカーコアを持つデバイス』を扱うことで発揮される。

デバイス：エリシオン

主人公の作る物語の登場人物を元に作られたデバイス。

その物語の歴史はこの世界に反映されていて、既にその世界自体は滅びている為にロストログア扱いである。

待機状態の形状は上腕部・肘・手首のリングと手首から第二関節までを覆うグローブの手甲に付けられた円状の金属片・五つの指輪をそれぞれ紐でつなげたような形状。

現在公開されている内容は

力の『トールハンマー』

特殊重金属を固めて作られた鉄柱のようなハンマー型デバイス持ち手の下にゴムのように伸びて投げてでも回収できる仕様になっている、基本状態からかなりの高熱を発している。

リンカーコアの希少資質は「行使者」、総合ブーストにより筋力値、魔力値が使用者の能力＋Xとなる。（Xはその瞬間に持っているものを確実に振りぬけてなおかつ確実に寸止めが出来るために必要な値）

インヒューレントの魔法として

熱量Ⅱ＋身体能力値に変換して出力を上げる「メギンギョルズ」がある。

ゼノンシステムと呼ばれる防御魔法があるらしい。

炎の『纏緋焰』

雷の『リベリオン』

氷の『ユグドラシル』

盾の『ナラカ』

技の『カオスドヴェルグ』

となっている。

デバイス：アーカイブ

主人公の部屋の机、いわばパソコンのようなもの。

次元世界用のネット空間に繋がっているがどの程度調べられるかは不明。

キャラクター（死神）：カルマ

主人公をこの世界に引きずってきた死神。

主人公（転生前）の腹位までしか背丈のない少女、一応全身黒尽くめ、死神は色が黒であればどんな服装でも良いらしい。

戦闘力は不明。

ブローグ

自分は気が付けば周囲が真っ白な空間に居た。
あまりに白くて地面との境も分からないし平衡感覚も狂って来そうになるほどだ。

。。。。あれ？

確か自分は布団で寝てたはず。

。。。うん、友人とメールでなりきりチャットみたいに物語を作り合って明日の学校の為にかばんの中を（といっても教科書類を全部突っ込んでるから何が無くても何が足りないのか分からないんだけど）確認してから布団の上に寝転がったのは覚えてる。

ということは夢なのかな？自分は夢はあまり見ないはずだけど。

夢を見るときはそのことで精一杯で夢なんて思える状況じゃないけど、案外落ち着いて考えられる夢だったら夢って思えるのか？
だとしたら覚醒夢って意外となりやすいんだね。

とか考えてたらなんだか向こうから何かが飛んできた、跳んできたのかもしれないけど良くわからないから飛んできたでいいや。

「オツメデトウゴザイマ〜〜ス!!!」

「いや、何がめでたいのか分からないんだけど」

とりあえず顔が近かったから目潰ししておいた。

「あいたたた。。。初対面の人にいきなり、それもグーならともかく目潰しとは目の付け所が有りますね」

「どこに目の付け所が有るのか分からないけどとにかく誰？そして何がめでたいのか知りたいんだけど」

少しはなれて見ると飛んできたのは小学生くらいの女の子だった。

。。。目潰ししておいて何だけど自分ってロリコンだったんだ、いや、確かに作ってたキャラはほとんど女の子だったけど小学生のは三名だけだったはず、それとも東方のオーエンを聞きまくってるせいかな？

とりあえず何がめでたいのか知りたい、もちろん自分の誕生日ははるか先だし何かに受かった記憶もない。

そもそも夢で祝われる筋合いはない、呪われるならあるかもだけど。

「それでなんですが、貴方は見事神界宝くじに当選しましたのでそのお知らせと商品の実行のために来た死神です」

「宝。。。くじ？」

「はい、因みに今の状況は夢の中にお邪魔させていただいております、いわば枕返しですね」

やっぱり夢何だと思いつつも状況についていけない。

いきなり宝くじなんて頭の中のネタ帳にも無いし、だいたいを持ってしてうさんくさい、JIMANGほどじゃないけどうさんくさい、夢だからいいけど。

「で、内容は？」

「意外と冷静ですね、それで商品ですが第一に貴方の来世はこれからの人生の寿命分だけ寿命が延びます」

「来世なんだ・・・」

「はい、理由がありますから・・・第二に貴方のご両親に貴方がこれからの人生で稼ぐはずだった金額の可能性の中で最高の金額分のお金をお支払いします」

「今度は両親・・・」

さつきから自分にメリットが無いな。

「さつきから僕自身には関係なさそうなことばかりだね、僕にはなにかないのかな？」

「あ、はい、貴方には死んでもらいます」

。。。ナンデスト？

「えっと、聞き間違えかな？今死ねって言われた気がしたんだけど」
「いえ、死んでもらいますよ？さつきから言ってますでしょう？」
「はずだった」って

「それだけはいりません、というより自分に得がないどころかなんで殺されなきゃいけないんですか!？」

「まあまあ、コレも結構いいものですよ？特に『自分の価値や意味を見出せないヒト』には」

その言葉に固まる自分の目の前にはいつの間にか黒い大鎌を右手に掲げる自称死神が居て・・・。

肩から心臓を何かが通る感覚と共に自分の意識は闇に落ちていった

S i d e : 夢の外

「さて、これからあの世界に送るとして、どんな能力とデバイスにしましょうか……」

眠り続ける少年の前で死神は次の人生で必要なものを集めていた。

「あ、この子の中にちょうどいい素材がありますからコレを利用しましょう」それではいくことにしましょうか」

そういつて少年と死神は闇の中に消えていった。

プロローグ（後書き）

はい、キャラクターだけはそれなりに出来ていますがストーリーは何も考えていません。感想お待ちしております。

一話

「っは!??。はあ、なんというかやな夢だった……」

うん、まさか夢の中で殺されるなんて思いもしなかった。

今までも夢を見るときはゾンビに追いかけられる夢とか家が蜘蛛の群に徐々に侵略されていく夢とかはあったけど死にはしなかったしね。

「とりあえず時間は。。。ってここどこだ?」

目が覚めた場所は部屋ではあったけど元の自分の部屋じゃなくて新しい。。。生活感のない基本セットしかないような部屋だった。

《おはようございますマスター、無事転生ご苦労様です》
「へ?」

一応学生としてなのか勉強机が置いてあり、その上に何かが光っていた。

《早速ですがマスター登録と設定をお願いしたいのですがよろしいでしょうか?》

「い、いや、ちょっと待って?どういふことが良くわからないんだけど……」

《状況説明の代わりとして原因となる人物からメッセージがあります》

「メッセージって。。。言うことは夢にあった死神は本物ってことなのか……」

《はい、メッセージ再生します

『無事転生おめでと〜』早速だけどそこりりなの世界だからそこにあるデバイス使って人生楽しんでね〜、主人公達と関れるように年も合わせて九歳くらいだからその辺りがんばって、特に二度目の小学校生活に』

。。。あの宝くじってもしかして転生トラックの派生だった？
ということはあの光る何かが自分用のデバイスってことか。

『最後にそのデバイス何だけど貴方が作ってた物語に合わせて作られてるから微妙にチート性能かもよ？念のため段階踏んでバージョンアップできるようにしてるから自由にやっちゃって、それじゃ後は机のふりしたアーカイバから調べてね』

。。。メッセージ終了しました』

「とりあえず、自分の現状から一つずつ確認して行こうか」

『はい、現在のマスターの体は現在習得能力が高く技能的なものなら大抵はすぐに扱えるようになります、あと簡単に死なれても困るということで制限を解けば生命力・体力は常人の10倍以上になっています』

制限を解けばってことは平常時は常人より少し高いって所か。
なら少しくらい無理しても遊べそうだな。

『次に魔導師ランクですが現在制限を掛けており、陸戦Cランクとなっており、希少技能としてリンカーコア接続が出来ます』

「リンカーコア接続って？」

『はい、他者のリンカーコアとマスターのリンカーコアを繋げることで資質の共有と魔力生成の底上げが出来る技能です、コレによって効率の良い魔力供給と多彩な技能を修得しやすくなります』

ってことはリンカーコアがあるやつの能力をコピーできるわけか、便利だけどそんなに使う機会はないような気もするな。

偽りの楽園

《では次に私の説明です、総合デバイス名：エリシオン、分割されていますので厳密な形状の説明は出来ませんがインテリジェントデバイスに属します、ですが特性としてはアームドの性質も保有しています》

「分割って言うことは複数のデバイスで構成されているわけだ、で、それぞれの名前は？」

《はい、力の『トールハンマー』雷の『リベリオン』炎の『纏緋焰』氷の『ユグドラシル』盾の『ナラカ』技の『カオスドヴェルグ』と登録されています》

あれ？多いな？盾のナラカは。。。あいつか、微妙に違う物語のキヤラまで入ってるけど特徴的だったせいだろうなあ。

え？それぞれの性質ですか？えぐいのも在るからまだ秘密♪

「それじゃ主に使うのは一番単純なトールハンマーをお願いします」
《了解です、それではマスター登録と設定をお願いします》

こんなものかな。

それじゃ原作の進行具合で見に行くとしよう。

一話（後書き）

すみません、まだ原作介入していません。
うまくやっついていけるかな。。。

二話

自分の住む場所になっていたのは遠見市のマンション、あのフェイト嬢の住むはずのマンションだった、しかもあの話で彼女が住んでいた階の下だ。

「でも肝心の本人はあの部屋にいなかったってことは、物語中じゃないのか？」

一期が終わってるか始まっても居ないならいいんだけどそのあたりが気になる。

九歳くらいと言ってたんだから一期か二期のあたりというのは確実だけど大丈夫なのだろうか？

「とにかく今は住むところの周辺の散策だね、今は主なところさえ分かれば良いから地図に従っておこう」

原作に介入すると言っても生活に困るようじゃ話にならないから今は駅とかを探して回っている、当然アーカイブから情報を引き出して地図は作っている。

そういえばあの机だけど意外に高性能だった。

画面は空間モニター式で引き出しを開けたらスキャナに印刷機もあった、内容も用語辞典だけかと思ってたら次元世界のネットにも繋がっていて俗語とかも調べられたし以前の部屋にあったゲームとかパソコンのデータとかもデスクトップの端に小さくだけど入れられていた。。。。後でモニターファームでもやろう。

「っと着いたか」

いろいろ考えてるうちに最後に回る予定としていた駅に着いたようで、今回は簡単に駅の内を回って料金表を探すだけで。料金表はアーカイブで見てもいいんだけどやっぱり実際に駅で見たほうが覚えやすい。

要領良いやつならそういう資料とかも全部コピーするんだろうけど自分は見る場所を覚えるのが一番だと思っている。

「鳴海市鳴海市。。。とやっぱり結構近いんだな」

鳴海市、一期と二期の舞台でジュエルシード事件の時に散々な目に合ってた街だけど二週間以内に復興できるとこは流石有名なものがいくつもある観光地というべきか、お金余ってるのかねえ？

「ただいま」

《お帰りなさい、マスター》

まず見るべきところは全て回ったので部屋に戻ったらデバイスの待機モードが完成していたようだ。

このエリシオンんだけど本来は馬鹿みたいにでかい装置らしくて待機モードもその情報を圧縮したりするのに時間がかかって形成が遅れていた。

なんでもとにかく容量が必要らしくて増設を繰り返していたそうだし、そのせいで待機モードも大きくなりがちで今回も左手に第二間接までのグローブと五つの指輪、指輪からつながるようにひもが伸びて手の甲の円状の金属片でまとまり、更にそこから手首のリング、肘のサポーター、上腕部の腕輪に伸びている形になった。

正直拘束具のようだけどこれはコレでいいような気もするから大丈夫だろう。

「ほえ、かなり大きなものになりましたね」

「！？」

《フォトンバレット》

「ウアット！？あぶないですよ、あ、デバイスさんのほうは初めまして、貴方のマスターの担当のカルマです」

「名前あつたんだ！？」

「失礼ですね、名前くらいありますよ、貴方と違って」

「あれ？」

そういえば名前考えてなかったな、どうしようか。。。元の名前だと情けないし、うん、脳内ネタ帳のネタを組み合わせ使おう。

「うん、名前決めてなかったから今つけるか、樹廻きめぐり 匠たくみとでも名乗っておくよ」

「早いですねえ、分かりました、それではそう登録しておきますね」

「それで、他には？」

「他は無いですけどそちらは何か質問とかありませんか？」

ああ、これってアフターサービスみたいなものだったんだ、元々が雑だったから意外だ。

「む、なんだか心外なことを言われた気がする」

「気のせいじゃないかな？それで、実は時系列のどのあたりかが分からないんだけど」

「ああ、それでしたら、本編が始まる一年前ですよ、いくらなんでも魔導師として習熟期間は必要でしょう？」

「んその心遣いは感謝するよ、でその間は何もしなくていいのかな？」

「いえ、少学校くらいには通ってもらいますよ、何せその年で何も

しないというのは不自然ですから
「えっ」

というわけで自分は本編が始まるまでの間に小学校に通うことになった

二話（後書き）

次からちと飛ぶかも

三話（前書き）

はい、すいません、むちゃくちゃ執筆に時間かかってます、亀投降なんて目じゃないです。申し訳ございません。

三話

「やっぱりこの時期になると探すのも難しいみたいだね」

今日は小規模次元震が起こる時期だ。

自分は全員のジュエルシード探しを見ながら当分見つからないだろうジュエルシードを三つ回収していた。

回収作業は監視していたけど特には被害が出るわけじゃないし巨大な樹が出てきた時以外は静観と後始末に徹していた。

向こうも誰かが見ていることに気が付いているようだし（特にフェイトは時々こちらを見ている）ソロソロ介入するべきかもしれない。

「でも今回の次元震が無いとアースラがこないんだったよね……どうするべきかな……」

システムゼノンは今バージョンじゃ使えないし、通常のシールドを反発力を高めて吹き飛ばすか、コレならデバイスが中破じゃなく悪くて小破程度で済むだろう。

「そうと決まれば準備は早めにだね、エリシオン：ツールハンマー、セットアップ」

《イエッサー》

自分のBJは若草色のチノパンツに深い緑のブレザー、その上に白に緑の縁取りの陣羽織を羽織っている姿をしている。

その上に大袖のような大型の盾をつけた鋼色の左腕全体を覆う籠手がつけられている。

デバイスはハンマー型だがどちらかといえば鉄柱に取っ手をつけたようなものでとても人に扱えるような大きさではない。

実際に籠手もデバイスも異常な重量だけどこのデバイスはそれでこそ意味を持つ特殊なものだ。

「リンカーコア接続」

《リンカーコア接続開始、希少資質『行使者』発動》

そう、このデバイスのリンカーコアには特殊な資質がある。

トルハンマーの場合は『装備を振り回せるだけの自働自己ブースト』で、受け止められた時にこの自己ブーストが働いて強制的に防御を貫通させることが出来る。

なのは嬢とてこのブーストによる一撃には耐えられないだろうね。

「っと、暗くなってきたね、ソロソロ来るかな？」

しばし待つて見ると魔力流が発生してジュエルシードが発動する。

Side:フェイト

「ジュエルシード・シリアル??、封印!!!」

早くあの子達より先に確保しなくちゃ、母さんが待っているんだから。

それにジュエルシードを探し始めた頃から時々感じるあの視線、特に封印する辺りではいつも感じる。

管理局ならすぐに名乗り出るはずだから違うんだろうけど目的が分からないから不気味。

何か妨害が来るわけじゃないから今は放置してるけど探してみても

場所が分からないということとは多分、あの子達よりもずっと強いと思う、場合によってはジュエルシールド集めの邪魔をしてくるかもしれないから早くしないと。

ジュエルシールド確保のために目的地に着いたらあの子達が待っていた、何のためかは知らないけど、自己紹介したって無駄なんだから。

END

「激しいねえ」

今はまだ未熟だけどなのは嬢の成長はすごいを通り越して異常だ。

出来なければ危ないとはいっても管理局員でもエース一步手前の実力にはなりそうだ。

あの無茶なトレーニングはこの頃からやってたのか？

理想を貫き通そうとする為には言っても良くやるもんだね。

でもあの理想はフェイト嬢にはまぶしく見えてるようだね、ほぼ一対一とはいっても戦闘中の会話に聞き入っているし。

つと、アルフから注意が入った、そろそろでなきゃね。

「チャージラウンドシールド、リアクティブバリアバースト：コンフリクトプラス！」

「なっ！？」「えっ！？」

対近接用の攻勢防御プログラム、元々の構成が強固なラウンドシールドを基本に防御系では考えられない魔力スフィアによるチャージと使い捨てになり魔力効率の悪いバリアバーストを組み込んだカウンター魔法だ。

魔力の塊になっているラウンドシールドに反発力強化の追加術式を

加えることで並みの魔導師なら弾き飛ばされた瞬間に意識を失うくらいはするかもしれない。

それを暴発しかけているジュエルシードのそばに居る二人の間に割り入って発動させた。

いきなりの乱入に驚いているようだけどなりふり構ってられない。

「ぐっ！？があああああああー！」

二人の被害を軽くする代償は至近距離からの次元震による爆発の被害。

直撃だけは避けられたけど空間操作系の無いツールハンマーの魔法系統じゃ耐えるしかない。

耐え切る為には……

「メギンギョルズ！！」

このデバイスの本当の特徴である『総合ブースト魔法』を発動した。

三話（後書き）

東「はい、東風の遁走者です」

樹「樹廻です」

樹「で、どうしてこんな遅れたのかな？」

東「はい、実際のところ仕事やってるんで休日しか掛けないんですよ」

樹「それだけ？」

東「はい、いえ、すみません、原作見直してました、今も見直します」

樹「良くコレで小説書こうなんて思えたね」

東「いや、もうホント名前のとおり逃げ出したいです・・・」

樹「まあいいや、とにかく、トツシー様、感想感謝です、こういう作品でも創作力が必要なんで努力してやっていきます」

東「それでは今日はここまでです」

樹「本当にがんばりなよ、作者」

東「（ビクッ！！）」

四話

S i d e : ユーノ

誰だ？

目の前でなのはたちを弾き飛ばした人物に僕は混乱していた。

「有り得ない……」

僕達が気が付かない内に二人の間に入るだけならそこまで難しいことでもないと思う。

でもあの状況で、それもその上で行ったことがありえない。

二人を弾き飛ばした魔法はチャージが必要な形式だったんだから。更に彼は見たところ空中戦は出来ないようだ

あの二人の飛行速度は遅くは無い、むしろかなり速い方だと思う。それが急にジュエルシードに向かって行ったんだから進路変更の間は無かったはず。

始めからこうなることが分かってなければ不可能なやり方なんだ。それをあいつは一体どうやってやったんだ？

END

「。。。。まずいな、ダメージがいきなり限界に近い」

次元震のダメージは予想よりはるかに大きかった、メギンギョルズを使ってなかったら意識失ってたかも。

メギンギョルズ。。。。トールハンマーが発する熱を生命力のような

ものに変えつつ全身に廻らせる事で己の身体能力を向上させる補助魔法。

補助の効率は精神的なものに左右されるけど速度、力、耐久力全てをバランスよく強化するから使い勝手はかなりいい。

その代わりだけど自分は今シヤナやサイヤ人みたいに全身真っ赤に光っている、正直勘弁して欲しい。

まあ自己嫌悪はコレぐらいにして、とりあえずはコレを封印してからフェイト嬢の側に渡すか。

フェイト嬢は。。。気絶してるから、アルフの方につ！？

「っアブなっ！！」

アルフが死角からいきなり飛び掛ってきたのをステップでかわす、確かに傍目から見れば自分が攻撃して撃墜したように見えるけど次元震の爆心地にあのまま居た場合を考えたらどうみてもあのほうがましでしょ！？

「主人を助けたつてのに乱暴だね」

「うるさい！！お前の持つてるそれをこっちによこせ！！」

「それはもう少し待ってもらいたいね、せっかく封印されてたのがさっきの戦闘のせいで目覚めてしまったんだから」

「ッグー！！」

どうやらジュエルシードの回収のために動いたようだ、それならさっさと渡すに限るね。

このデバイスじゃ氷らせることも出来ないからシーリング効果をプラスしたサンダーアームを起動してジュエルシードを握り閉める

。。。なんでこの攻撃性溢れる魔法が防御魔法なんだろう？どう見てもベルカの魔力付与攻撃系統何だけど。

「封印完了、これでいいかい？」

「待って!!」

ああ、なのは嬢のほうはまだ意識あつたんだ、でも待たない。

「だめ、今はまだこっちに分があるからね、今日のところはデバイスが壊れなかっただけ嘛だと思ってくれればうれしいかな」

「なんでこんなことするの!!理由を聞かせて!!」

「理由、ね。。なぜは無いけどどうしたいかが分かってるから、というところかな」

「え?それはどういう意味・・・」

「それ以上はまだ答えないよ、知りたいなら明日の分の回収の後に鳴海公園で、だね、そっちの守護獣も知りたいなら来るように伝えたい」

「・・・ふんっ!!」

アルフは自分の言葉を聴いてすぐに飛び去っていった。。。どうせ帰ったらほぼ同じ住所なんだけどね

「ああ、そっちにはもう一つだけ、さっきので管理局が多分こっちに来るとおもうよ、じゃあね」

それだけ伝えれば十分だろうから帰るとするかな。

Side: なによは

あの人は私に何を伝えたかったんだろう?なぜは無いつて言ってたけど理由が無かったらああいうことはしないとと思う。

でもなんだか私にとって重要なことな気がする。

何かは分からないけど、明日話を聞くまでに少し考えてみよう。

「なのは」

「うん、帰ろっか、ユーノ君」

とにかく今は日常に帰ろう。

END

今日は疲れたよ。。ジュエルシードの次元震の魔力が逆流してデバイスが大丈夫か心配だったし対策として自分の体に逆流した魔力の一部を巡らせて受け流してたから流しきれなかった分で内蔵とかぼろぼろだし。

明日は学校を休んで時の庭園とクロノ戦があるんだ、メギンギョルズだけじゃなくて次も解禁しておいて寝よう……。

おやすみ。。。バタリ

四話（後書き）

えゝ、メギンギョルズなのですが、実は段階があつてだんだん名前が長くなっています。

あと前回と今回公式設定を利用した魔法を使っていますが、実際に可能かどうかはただの妄想です

五話

「ふあゝあ、意外と良く眠れた……」

飯食ってさっさと転移の準備をしないとね、時間は。。。八時！？

「エリシオン！！転移の観測はできてる！？」

《はい、まだ転移反応はありません、準備も完了しています、マスターの予測通りの位置で転移を行うとするのでしたら座標も問題なく観測できますよ》

「よし、それなら転移先が分かったら転移先の観測もやってね」

《了解です、マスター》

よし、ならこれからの為の戦闘用魔導プログラムでもやっておこう、シーリングアームとコンフリクトシールド＋は戦闘用じゃないし。

・・・うん、スターダストフォールの魔改造だな、カートリッジ三つくらい使ってトールハンマーを加速させよう。

。。。あ、言い忘れてたけどトールハンマーにはカートリッジシステムが組み込まれている。

ただし、トールハンマー自体にじゃなくて一緒に装着される左腕用の籠手『イルアン・グライベル』の大袖に組み込まれている。

この籠手は正確にはバリアジャケットではなくデバイスの一種、ストレージタイプで余剰魔力の蓄積を、更に貯まっていけば専用のカートリッジの精製を行い、その魔力を使って自分の消費なしに自働発動にセットされた防御魔法を使用することが出来る。

個人で行動する以上はカートリッジの支給を見込めないんだからコレぐらいしておかないと体力も魔力も持たない、因みにカートリッジは二十八発入って七発分くらいが魔力バッテリーに込められる。

《マスター、転移反応がありました、場所はこのビルの最上階、転移先は『時の庭園』です》

「よし、それじゃ転移先での二人の映像を中継しておいて」

《了解》

「時空転移・座標：時の庭園、テストロッサの主の下へ向かいし二人の地に」

Side：アルフ

パシッ！！パシィィン！！

なんで、なんでなんだよ！！ロストロギアを三つも持ってきたじゃないか！！

それであの仕打ち、あんなものが実の娘よりそんなに大切なのかい！！

あんまりだよ！！

ドオオオオオン。。。。！！

「！？。。。。アタシ。。。。じゃないよね？じゃ一体誰が？」

と思えば部屋からあの女が出てきた、やけに急いでたけどさっきの衝撃と何かかんけいがあるのかい？

いや、でもこれはチャンスだよ、今のうちにフェイトを連れ出さなくちゃ。。。。。

END

ガシャン！

「コレで349個。。。ずいぶんと大量に作ったものだね、ちゃんと生まれた子にはあの仕打ちだって言うのに一つも廃棄しなかったなんてね」

コレぐらい壊せば問題ないだろう、アリシア嬢本人のシリンダさえ壊さなければ他はむしろ彼女にとって邪魔なものなはずだ。命を弄ぶ技術がいけない訳じゃないけどこの子達はまだ生まれてこないほうがこの時代では幸せだ。

せいぜいが生体部品かモルモットにされるだけ。なら命として生まれる前に眠らせたほうがまだ。

「ここで何をしているのかしら？」

「ちよつと探し物を」

ようやく来た様だけどすごい形相だね、そりゃ娘が殺されかけてるようにはしか見えないからそうだろうけどね。

「まあ、ここでの用は済んだからこっちはもう帰るところだけだね」

「させると思ってた？」

「いや、するよ、まだやらなければいけないことがあるし」

轟っ！！バチッ！！

「それ本当にフォトンバレット！？なんだか小さめの砲撃魔法っぽいんですけど！！」

「デバイスで防いでおいて何を言ってるの!!」

今度は七つの誘導性の魔力弾を形成してきた、流石推定オーバーSの魔導師、射撃魔法なのに込められている魔力が下手な砲撃魔法より多い、でもその代わりなのか数は少ない、といっても七つもあれば十分な鉄壁なんだけど。

自分は直線的ながらも鋭角的に飛び交う五つの魔力弾をトールハンマーで弾きながらチャンスを伺っている、流石にこんなのはシーリングアームでは封印しきれない。

(エリシオン、長距離転移を詠唱破棄で、できる?)

《その場合用意に時間がかかり、処理の補助と保険の為のオートガイドが使えなくなります、危険ですがよろしいですか?》

(このまま削り落とされるくらいならかけたほうが良いと思うからお願い)

《了解、では、御武運を》

「メギンギョルズ!!」

ブワッ!!

全身に熱が廻るのを感じながら自分は次の手を打つ

「カートリッジロード5、システムセカンド：ジェットブースト起動、加速環状魔法陣スターダストフォール展開!!」

トールハンマーの側面部からジェットエンジンのようなブースターがせり上がり、投げる際に抵抗を作るようにエンジンから加速用のジェットが噴き出す、そして正面に対して加速用の魔法陣を無数に作れるだけ作る。

危険を察知したのかプレシアが射線上から離れるけど、この魔法は

屋内じゃ避けることは出来ない。

いや、避けてもその余波はアリシア嬢のシリンダを巻き込んで破壊する。

「プレシアさん、防御魔法くらいはかけないと娘の体は消し飛ぶよ」

その言葉に彼女はアリシア嬢のシリンダを引き寄せて強力なバリアを張った、その代わりに魔力弾が七つ全部襲い掛かってくるけどもう遅いよ。

「メテオフォール・ソニックブレイク！！」

自分は抵抗を押しつけるようにトールハンマーを『投げた』。

投げた瞬間にジェットブースターの噴射方向を切り替えて加速させ、更に環状魔法陣を通して瞬間的に速度を『音速』まで高める。

魔導師は通常、摩擦を軽減しながら飛行するから音速までは行かずともかなりの速度を出せるから音速はたいしたことじゃないと思われがちだけどコレは逆に反発力を強めて周囲に魔力を伴った衝撃波を撒き散らす、非殺傷設定にするには物理攻撃割合が高い、逆にダメージを抑える為に魔力を消費するようになってくる危険な魔法だ。その中心になるトールハンマーの威力もすさまじく隔壁を打ち抜いて時の庭園の外まで投げ出される。

その衝撃波の嵐が過ぎ去ったときには自分はデバイスに引っ張られる形でその場から姿を消していた。

S i d e : プレシア

「やられたわね……」

あの子、私の秘密を知っていた。

私とアリシアのことを邪魔するだけなら排除するだけだったんだけど、最後のあの魔法の際に私達を死なせないようなことを言っていた。

不可解な行動ね。。。何をたくらんでいるのかしら？

「。。。それはともかくこの惨状はどうにかしなければね」

さっきの魔法の余波で部屋は廃墟のようになっていた、その光景に私は思わず顔を顰める。

コレだけは許せないわね。

五話（後書き）

どうも、東風の遁走者です、ようやく介入し始めてますけどまだまだ原作から離れないように行動中です。

知りたいことや矛盾・書き方の問題などの指摘があれば感想にてコメントお願いします。

聖様、感想ありがとうございます。

クロノは多分次か、部屋に戻っての話を入れて次の次には出撃するかと思います。

それではまた、次回にめぐり合えることを願っています。

六話（前書き）

連休が欲しい・・・

六話

いやいや参った。

まさか短時間で長距離転移二回に切り札二枚も切らされるなんてね。コレじゃクロノ戦にはトルハンマーは使えないなあ、「技」「炎」「盾」のどれかなら出来たかもしれないけど自分の技量としてこの三つはまだ封印しておいたほうがいい。

とすれば「氷」か「雷」のどちらかだけど。。。待てよ？

「確か第二期はこの事件が終わってから半年ほど後。ということはそのまでに魔力ストックを作っておかなくちゃいけないんだから準備はもう始めないといけないところだったっけ」

ヴォルケンリッターとは始めは距離を置いておきたい、特に蒐集なんてされたらその後の残滓達に自分が混ざって。。。あれ？

「そういえばデバイスのリンカーコアが蒐集された場合はどうなるんだ？」

《はい、推測ですが素体となった人物が蒐集されたのと同じ状態になります》

「何か知ってるの？」

《はい、というよりも私の分割体であるデバイスの仕様になるのですが、建設者の意向によってデバイス毎にリンカーコアの情報の素体となった人物そのものと本質として同じものになっているのです》

ってことはこのデバイスは物語中での使い手そのものでもあるってことか。

《また、私の制御を離れたときの自己防衛及び情報漏えい防止の為

の予備管制プログラムと実体具現化プログラムにもそのデータが使用されていますので容姿や人格なども完全に揃ったデータとして保存されています」

「ってことは守護騎士プログラムに似た様なシステムがあるの？」
《それは夜天の魔導書の防衛用プログラムのことでしょうか？でしたらそれより汎用性があるプログラムが搭載されています》

汎用性があるって。。。まさか…………。

「カオスドヴェルグの暗鬼夜虹？」

《はい、もう一つありますがそこらはまず使用されないと思いますので省きます》

「そうしてくれるとうれしい…………」

流石に頭が痛い。。。あの2つシステムが実体具現化プログラムで再現されてるなんてたちが悪いにも程がある…………。

でもこの実体具現化プログラムってなんで使われないんだろう？ユニゾンデバイスの管制プログラムや実体具現化が確立されてるわけだから不可能じゃないはず何だけど…………。

《それで、氷の封印を解いておくべきかと思われませんがどうしましょうか？》

「ん？ああ、大分横道にずれてしまってたね、うん、対クロノ戦用の緊急措置だし後のこともあるからそうしようか」

《了解》

さて、ユグドラシルは基本は祈願型だから特殊なプログラムは必要ないんだけど・・・ブースト用の魔力結晶は作っておいたほうが良いね、カートリッジシステムがないから何時魔力が切れるか分からないし。

でもその前に……。

《どこに行くのですか？マスター》

「上の階」

S i d e : アルフ

アタシは今マンションに帰ってフェイトを寝かしつけたところだ。
今日目覚めるジュエルシードのためにご飯を食べることにするとふ
と連れ帰ったときのことを思い出す。

連れて帰れたは良いけど、あの時の衝撃とあの女の顔が気になって
くるね。

大抵のことに動じないで無関心でいるあの女が焦っていた理由が分
からない。

もしかしたらフェイトを救い出すのに役に立つかもしれないね。

ピン、ポーン

誰だい？こんなときにこの部屋に来るなんて。。。この部屋に来る？

「誰だい？管理局の連中はここらには居ないみたいだし、この世界
には魔導師なんてほとんど居ないはずだよ？」

昨日のあの白い少女のことを思い出すけどあいつらはそういつこと
の探索は得意じゃなさそうだし、いや、もう一人居た。

昨日は最後の一瞬しか居なかったから忘れてたけどあの馬鹿でかい

棍棒を肩に担いでたガキなら。

フェイトが時々どこか見てたのを探ってたら感じた視線があいつの
だったならこのことも知られておかしくないかもしれない。

「アルフ、どうしたの？」

「い、いや、なんでもないんだ、フェイトはそのまま眠っててよ、
今日もロストログア集めるんだろう？」

危ない危ない、いつの間にかフェイトがあたしの様子がおかしかった
のか起きてたよ。

「アタシは下でご飯食べてくるから、フェイトもちゃんと食べておく
んだよ？」

そういつてアタシは下に下りるとすぐに玄関に向かった。

END

「こないなあ・・・」

《逃げなかったのでしょうか？》

「それは多分ないと思う、あれの怪我はロストログアを集めるとき
にするなんて考えられないくらいだし」

『何のようだい？』

お、ようやく来た、といつても警戒されてるようだけどね。

「ちょっと見舞いにね」

『信じるとでも思ってるのかい？』

「つれないね、せっかく陽動であの場を離れるきつかけを与えたと

いうのに」

お、向こうで息を呑む感じがしたな、もう一押し。

「詳しく聞きたいなら入れてもらえないかな？もちろん君の主、フ
イト嬢には手出しはしないし会わせたくもないって言うのなら会
わない、どうせ用があるのは君の方にだし」

『。。。入りな』

さて、どこまでの公開が望ましいかな？

六話（後書き）

はい、次のジュエルシード集めまで話が進みませんでした。すみません。

akatuki様、感想感謝です。ご指摘ありがとうございました。

七話

「。。。。。。それ、本当なのかい？」

「少なくとも嘘になるようなことは言っていないよ、話していないことも無いとは言わないけどね」

やっぱり怒るよね、主人の扱いの理由があんなこと何だし。

アルフには一期で話せる内容を少しばかり話した、その上で自分のことも聞かれたけどそれはアルフを管理局に接触させる以上は詳しくは話せない。

話せば管理局は確実に捕獲の為に動き出すからね。

他人の知らないところまで知っていながら流れを変えずに被害を抑えるだけなのは偽善でしかないけど、深いところまで手を加えて流れを変えようとして比べ物にならない被害が出て意味はないしね。

「まだ君が動き出すのには早いけど、今じゃないと今後起こることは隠れて防げないからその分は任せたよ、あとコレは君の主人には本人が別口で知るか聞かれるまでは出来れば言わないで」

「なんでだい！！今すぐにでも」今話すとあの子は立ち直れないよ」
「！！」

母親が第一になっている今のフェイト嬢じゃ真実を知ったら立ち直れない。

なのは嬢の言葉が無ければ一人じゃないということ思い出せない。彼女に必要なのは対等に話し合える友人であってそれを確保する場所だ。

「今は今までどおり主人を助けてやって、見守ってやって」
「。。。。わかったよ」

これでもう十分か、それじゃもう準備するかな。

「そういえばあんた、どうやってここに着たんだい？ここは念入りに結界を張って分らないはずだったのに」

「あ、やっぱり気が付いてなかったんだ、僕はこの部屋の下の階の住人だよ」

「は？」

ああ、はとが豆鉄砲を食ったような顔ってこういうのを言うんだな・
。。。

「それじゃ、僕はここで退散するよ」

まだやらなきゃいけない作業があるからね、のんびりもしてられない。

Side:フエイト

。。。。？

何だろう？目が覚めたらアルフが難しい顔をしている。
寝てる間になにかあったのかな？

「アルフ？」

「ん？ああ、起きたのかい、どうだい調子は？」

「私は大丈夫、アルフは？」

「アタシはいつも万全さ、フェイトみたいに吹き飛ばされても居ないからね」

「そっか、それじゃすぐに行こうか、もうすぐ目覚める子が居る」

「そういえばアイツも昨日そんなことを言ってたね……」

あいつ？昨日意識を失う前に出てきた子のことかな？

「？アルフ？そんなことって？」

「昨日例の視線の送り主がね、退却する前に今日ロストロギアを封印したら公園に来て言ってきたんだよ、それって今日ロストロギアが目覚めるってことじゃないか」

「昨日から。。。注意したほうがよさそうだね、いつでも離脱出来るように準備していて」

「わかったよ」

母さんのためにあのロストロギアを集められなくなったらいやだからね。

END

さて、時刻は5:25、アニメでは下校時間あたりの夕方頃に発動してたからそろそろだ。

樹の暴走体だからそっちはツールハンマーで十分だろう。参加しなくても二人で協力して封印はしてくれるだろうし場所は分かっているんだから自分がさっさと封印してもいいんだけど、管理局が今日介入してくることを考えたらどっちもまずいかとも思う。

「なんというか、暗躍って難しいなあ」

《仕方ないでしょう、形は違えど他人に気を使うのですから》

お、なのは嬢が来たね

「エリシオン：ツールハンマー、セットアップ、同時に接続も」
《イエッサー》

これで準備はOKってことでなのは嬢に向かう

「こんにちは、いや、こんばんはかな？なのは嬢」

「ふえ！？あ、こんにちは、えっと・・・」

「今は『語り部』とでも名乗っておくよ、とはいっても何も語らないし話に介入してるから間違ってるんだけど」

でもこれ個人的には気に食わない

「もう少しでフェイト嬢も来るはずだからそれまでは封印しないように、賭けるんでしょ？」

「あ、はい。。。ってなんで知ってるんですか？」

「ん。。。それは秘密ってことで」

そこにフェイト嬢が現れた、目覚める前に来たって言うことは、介入した甲斐があったのかな。

「こんばんは、予想より早いね」

「。。。早く封印しよう、話を聞きたい」

約束は聞いているのね。

青い魔力光が公園の海側で解き放たれる。
そこに向かうと予想通り、人面樹が居た、その場から動けない為か

根を始めから本体を守るように壁にしている。

ドラクエのやつもそうだけどこういうのって移動できない上に種の運び手は捕食するのにどうやって種を増やすんだろう？まあ、こっちのやつはその必要自体が無いからそれでもいいんだらうけど。

「アークセイバー！！」

先手はやっぱりフェイト嬢、魔力刃を飛ばして根と根の間に道を作りながら突撃する、それを援護するように空に飛んだのは嬢が砲撃準備をしている。

自分はあるの二人の連携が自分は好きだ、始めから役割が決まっているかのように、お互いの長所を生かせるように行動出来るのはなぜだらうかとも思う。

フェイト嬢の魔力刃は人面樹の前まで道を作るがそこでシールドが張られていて弾かれる、それでもフェイト嬢はそのシールドを破壊しようとするが進路上に根が飛び出してきて足を捕まれる。

「デイベイイイン、バスター！！！！」

なのは嬢の砲撃が根の根元をなぎ払いながらシールドに撃ち込む、が、力が拮抗しているのかひびが入るもなかなか破壊されない、破壊されたと思えばその後に幾層もシールドを張り巡らせていたようですぐに止められる。

「フェイト嬢！！追加で砲撃するよ、タイミング合わせて！！」

「分かった！！」

フェイト嬢はサンダースマッシュの体勢に入る、でも今回の樹は

なぜだかアニメよりも何か手ごわい、もう一手必要だろう。

だから

「サードシステム起動」

自分は片ひざを付いて両手でツールハンマーの先端を人面樹に向け、この「力」のデバイスで一つしかない砲撃魔法用の形態を起動する。カノンシステム、このデバイス先端を龍の咆哮のように開いて「唯一の純魔力攻撃」を行う為の形態。
炎の魔力変換技能のあるこのデバイスにはこのシステムを起動することによってそれを応用した魔力の収集法がある。

「え？。。。冷氣？」

近くに居たなのは嬢は周囲の気温の変化に戸惑っているようだ。

「逆変換魔力収集開始、カノン用スフィア形成」

冷氣を生み出すのではなく周りの熱を奪って行く為に周囲の気温がどんどん下がっていく、奪った熱を魔力に変換して六つあるスフィアに圧入していく。

このデバイスのリンカーコアに残してある魔力もそのほとんどを魔力スフィアにつき込んで、限界まで出力を高める。

「カノンバレル魔力導線砲撃！！」

「サンダースマッシャー！！」

フェイト嬢と共に砲撃魔法を放つがシールドで止められる、でもそれでいいさ。

「出力限界超過砲!!」
エクシーガカノン

六倍にしてやれば貫ける。

S i d e : なのは

なにになになに!? 語り部さんの砲撃は一番魔力が弱かったはずなのになんでいきなりわたしたちの砲撃ごとあの固い樹の暴走体を吹き飛ばせるの!?

あれを使えるようになったらフェイトちゃんにも勝てるかもしれない...。

ユーノくん相談して今の魔法がどういうものなのか調べてみたいな。

七話（後書き）

・・・この部分後で作り返したいなあ。

八話（前書き）

いや、すいません、なんていうか、放置状態でした、そしてこれからも更新は放置同然だと思うので気が重いです。

八話

Side: アースラ

アースラでは昨日から小規模次元震の原因を調べながら震源地に向かっていた。

小規模とはいえ次元震は世界を崩壊させるかもしれない要因のひとつなので被害が拡大する前にその原因を取り除かなければいけないからだ。

モニターには震源地である管理外世界の情報。。。特に鳴海市周辺の情報を映していた。

「リンディ艦長、ロストログリア反応出ました、どうやら現地で回収を行っているとされる三組もその場にいるようです」

「あら？三組とも対立していると思ってたけど封印する段階では協力する構えをとっているのかしら？」

「はい、特にあの男の子が主だった仲介役として話をしているようです」

船員がキーを操作すると三人分の魔導師のデータが表示される。

「あの子は見たところ一つも持っていないようですが、閉っているのにその中心になってるものに興味が無いとなると逆に怪しいわね」

「魔力反応も出ない様に多重封印を施しているか結界の中にしまっているかもしれないですね」

「多重封印？でもあの子にはそれが出来るほどの魔力量はないわよね？」

データ上の少年の計測魔力量は他二人の計測量の十分の一もない、

どう考えてもBランクが限度だ。

「それが。。あの子から以外にデバイスそのものから魔力反応がでているんです、まるでリンカーコアが内蔵されているような」

「リンカーコアが内蔵されている？そんな小型の魔導炉が内蔵されているのかしら？だとしたらロストロギア並みに危険ね、クロノ執務官、もし彼女らが戦闘を始めるようなら頼みましたよ？」

『わかっています、僕はそのために来ているんですから』

END

鳴海公園上空で二人の少女が向かい合っている。

理由はジュエルシードを賭けての決闘、そして自分の意思を貫く為。

「フェイトちゃん、わたしが勝ったら、ただの甘ったれたただけの子じゃないと分かって貰えたらお話聞いてくれる？」

その言葉にフェイト嬢は無言で駆け出すことで答える、なのは嬢もそれに応えて駆け出す。

そして二人の魔導師は激突した。

「さて、今回は種の覚醒と封印が予定より早かったからまだ介入はされていないようだけど、もうそろそろくるよね」

樹廻は決闘のジャッジとして公園の木の上で二人の戦いをながめながら次の戦闘の段取りを考えていた。

トールハンマーのコアの魔力は封印の際の魔力で空になったから他のデバイスから供給を受けない限りは使えない、けどあの執務官足はしつこそうだからなあ。。。シーリングアーム使って戦えないようにしたいんだよね。

でもギリギリまで他のデバイスは隠したいし。。。カートリッジを使うのも手だけどこれも既に滅んでる技術のはずだし。。。

《マスター、流出を避けたいのも分かりますが必要ならば躊躇わないほうがいいかと思われます》

「それはいつそのこと今使える分の許容範囲ギリギリまで行使して撃退したほうが良いってこと?。」

《イエス、マスター》

「今の全力を出してもまだ隠せることはいっぱいいるか。わかった、それじゃ氷をお願いね」

《イエッサー》

トールハンマーをモードリリースしてイルアン・グライベルの内のデバイス本体から青い玉を取り出す。

《マスター、複数の転移反応があります》
「複数?。」

その疑問と同時に答えが現れる。

「ストップだ！僕等は時空管理局員だ。その権限でこれ以上の戦闘行動の停止を命じる。全員、速やかにデバイスを収めるように。詳しい事情を聞かせてもらおうか？」

クロノ以下管理局員十数人が自分たちを囲むように構えて転移してくる。

コレってプレシア捕縛用のチームじゃないのか？ということは早速でも本気で捕まえるつもりってことか。

いきなりの事態に決闘の最中だった二人もその動きを止めて周囲に注意を払っている。

一方は警戒と脱出のため、一方は驚きと多分怯えのため。

周囲の管理局員は少しでもことを起こせば捕縛のために魔法を撃つて来るのだろう。

「その前に質問は良いかな？」

「却下だ、質問は艦内で事情を確認した後に聞く」

「それじゃ意味ないんだけど」

「とにかく却下だ、抵抗するなら捕縛させてもらうぞー！！」

これがKYの力か。。、やっぱり話きかないんだねえ。。。。

「なら、望みどおりに抵抗させてもらうよー！！^{ユグドラシル}世界樹ー！！」

《イエッサー、ユグドラシルセットアップ、コア接続》

「な！？全員放てー！！」

右手のデバイスを起動して構えると同時に樹廻に様々な色の魔力弾が集中的に襲ってきてその際に巻き上がった煙で姿が見えなくなる。

普通の魔導師なら防御魔法を使うのも難しいタイミングでの弾幕だったのでクロノは視認でき次第捕縛してアースラに連れて行くよう局員に伝えて残りの魔導師に気を向けることにした。

「残りの魔導師も早くデバイスを収めるんだ、抵抗するなら実力行使に出る」

「いや、実力行使も別に良いけど鎮圧対象の無力化を確認できないうちに部下に任せるのはちょっと、どうかなあ？」

「!?!」

「その隙が命取りだよ？零式：機雷晶」

フェイトとなのはの周辺に居る局員の近くで謎の爆発が起こり局員が撃ち落されて行く、煙が晴れるころにはクロノ以外の局員は全員撃墜されていた。

先程の弾幕による煙が晴れると樹廻りのその右手には青と白を基調にした長い杖が握られていた。

杖の周りには八面体の結晶が螺旋状に並んで浮かんでいる。

「ここからが抵抗の本番、魔力の貯蔵は十分かな？」

「っ!!別のデバイスだ?!?!」

クロノにはその意味が理解できなかった、デバイスはあくまで魔法を記憶して詠唱と処理の負担を減らす為のもので、武装としての意味合いを兼ねた例外もあるが基本は変わらない。

ましてやその例外から杖型のデバイスに変える必要なんて全くない

のだ。

周囲の局員を警戒していたフェイトもその変化に驚いていた。局員を落とした爆発は空色の魔力光をしていたのだ。

ジュエルシードの封印の際に発していた魔力光は朱色だった、つまりあの爆発が全く別の誰かによるものでない限りは彼の魔力の質が変化したということになる。

それについていろいろ考えているとアルフから念話が入る。

（フェイト！！脱出するなら今しかないよ！！）

（でも！！）

（わざわざあいつがここから逃げやすいように周囲の局員を落としてくれたんだから！！時間がないよ！！）

（アルフ。。。分かった、一回長距離転移するからその後の短距離転移はお願い、あと時間を稼いで）

（分かったよ！！）

フェイトが長距離転移用の魔法陣を展開する、クロノもそれに気づくがアルフが魔力弾を放って妨害する。

そこに

「抵抗させてもらって言ったでしょ？零式：フォレストバスター」

クロノに向かって四条の大口径バスターが撃たれる。

クロノがそれを避けている間にフェイトとアルフの二人は転移を完了させてしまう。

「邪魔をするな！！業務執行妨害で捕縛する！！」

「どうせ取り押さえる予定だったんでしょ？なら今更だよ」

「勝手なことを言う！！」

「勝手何はどちらさ、不法入国に強盗、強制連行、おまけに誘拐監禁、暴力行為まで行うのが確約済みでしょ？この国に死刑の法律はないだろうけどもしあったなら満場一致で公開処刑とか言われかねないね、まあ流石にそこまで行くことはめずらしいだろうけど国際問題に発展するレベルの話なのは確実だね」

「な！？何を言っているんだ！！僕等は管理局だぞ！！」

「だって調べたところここは管理外なんですよ？管理されていない世界に対して権限なんてあるわけないでしょ、ましてや君たちは正式な巡回路を外れての独断行動じゃ無いのかな？」

「う、うるさい！！ステインガーレイ！！」

クロノが速度重視の魔力弾を放つがいくら速くてもまっすぐ来ると分かっている魔力弾ではやすやすと避けられる。

「そんな様子じゃコレまでもどこの世界でも我が物顔で行動してたみたいだね」

クロノはその後も様々な魔法で攻めようとするがどうにも怒りで狙いが甘い。

「はあ。。。コレじゃ犬猫のじゃれあいと変わらないね、もう休みたいし終わらせるかな」

クロノの観察から攻撃に切り替えるために杖の周りの結晶を十個ばかり前に出す。

この結晶はカートリッジシステムの概念を基本により負担を少なく使えるように作り変えたものでスフィアを圧縮・不安定ながらも結晶化させたもので一定以上の魔力をぶつけることでその魔法に同調して強化する性質を持たせている。

このおかげで比較的反動の大きい砲撃系統の魔法を射撃系統のような数で放てるのだけど同時に問題もいくつかある。

まず同調した瞬間の制御が難しくなる、結晶の魔力がいきなりその魔法に注ぎ込まれるのだから当たり前なのだけど強化された瞬間に大抵は魔法行使の制御範囲を振り切ることになる。

撃ちっぱなしの直射砲撃であるバスターなら着弾位置の制御を放棄することで対策は出来るが常に制御が必要な誘導射撃魔法は同調と同時に魔力弾が暴走してはじけ飛ぶ。

もう一つは単純なもので、コレは要するに魔力による爆弾なのである、使い方さえ知っていれば持ち主以外でも使えるし手元に置いておくのは非常に危ない、炸裂効果のある魔法や広域攻撃を受ければそれに同調して自爆することになるので普通は作れたとしても誰も使わないだろう。

（でもコレも使いようだしね）

ユゲドラシル
世界樹の中にあるリンカーコアは氷の魔力資質とそれに限りなく近いが異質な資質があるためにカートリッジではなくこの魔力結晶の方が相性がいいのだ。

「機雷晶五、かく乱誘導」

《物質誘導開始》

「させるか！！ステインガースナイプ！！」

五つの結晶を飛ばすとクロノもそれに対応して誘導射撃魔法を放つ。

（込める魔力値が高いということは貫通型の誘導魔力弾かな？）

ということはクロノはこの魔力結晶の性質を知らない可能性が高い。

案の定クロノは正直に魔力結晶の一つを迎撃する、ぶつかり合う二つの魔力は混ざり合いそれまでの制御力では到底制御しきれない魔力量となるとスフィアの形状を維持できずにはじけ飛ぶ。

クロノは急な魔力量の増加による負荷で刹那の思考の空白を作る。

「そんなことで怯んでたら乱戦になったとき危ないんじゃない？」

その隙はクロノをチャージ無しの砲撃で撃ち落すには十分だった。

撃ち落されたクロノは素早く立ち直る為に樹廻がいるだろう場所に目を向けようとして樹廻の左手を見る。

「当分の間リタイアしてもらっよ、強制的にね」

左手のデバイス、イルアン・グライベルが青い電光を纏わせてクロノの頭をつかみ上げた。

「グ、ウァアアアアアアアア！！」

シーリングはプログラムに割り込みをかけてバグを作り出して停止

させる魔法、イルアン・グライベルのそれは電流のパターンにウィルス又はワームを忍ばせて内部からそれを行う魔法になる、それは今回の場合思考能力の妨害として現れる。

「う・・・あ？」

「一式：氷牢、言ってもわからないだろうけど安らかに眠って」

思考能力を失い廃人同然と化したクロノを置いてその場から離れ（本当は投げ捨てるように突き放したかったけど普通は助走も無しにそんな力あるはずもない）、かく乱のために放った残りの魔力結晶を凍結魔法に同調させて周囲の空気ごと凍結させる。

この氷、一式にはデバイスに内蔵されたリンカーコアの影響なのか触れる者の感情を少しずつ凍結させる力がある（いうなればレアスキル「凍結」といったところか）、感情と思考の二つを封じられれば当分復帰することは出来ないだろう。

「聞こえてるだろうから管理局に言っておくよ、当分邪魔しないで、じゃないと今度は全員永久に廃人だよ」

そういつて自分はその場から立ち退いた。

S i d e：なによは

なのはは管理局の介入のあたりから一步も動けずにいた。朝にユーノくんから管理局の説明は聞いていたけど想像してたのは交番の優しいお兄さんくらいでこんな剣呑な状況になるとは思ってなかった。

それもみんな倒れちゃってどうしたら良いのか分からない。

あの人がこの場から離れてからわたしも離れようとしたところで目の前に画面のような光の板が現れる。

「管理局のリンディ・ハラオウンです、よろしければこちらに来て話を聞かせてくれないでしょうか？」

画面に移る緑色の髪の女の人氷付けになった男の子のほうを心配しながらわたしに確認を取り、さっきの出来事から他に選択肢の取れないわたしは管理局の船「アースラ」に向かうことになった。

END

八話（後書き）

はい、東風の遁走者です

黒野くんの言動って扱いにくいです。。。。

仕事の合間でやってると彼のキャラを固定するのが難しくて二回挫折しました。

このせいでこれからも更新は放置同然っばいです

九話

あの戦闘の後目的を果たした自分は部屋に戻っていた、正直デバイスのリンカーコアが一つ枯渴状態の上に一式の使用で意識が少しぼんやりしている。

纏まりにくくなっている頭で考えてもしようがないことを悩んでいた。

さて、ジューエルシードこわどうしよう？

決闘の際に公平さを保つ為に渡されたけど正直三つ持ってるから自分がこれを一つも持っていないって思ってたほうが行動しやすかったから正直邪魔何だよな。

かといってあの決闘はほぼ互角だったようだからどっちかに渡すのも躊躇われるし捨てるのは論外。

管理局には一戦やらかしてしまったから気が引けるし、他に渡せる相手は。。。

《居ないなら作ってみてはどうでしょうか？》

延々と悩んだと例の如くデバイスが提案をしてくれる、こういうときこのデバイスは気が利いて助かる。

でもまだ早いんじゃない？連携なんて苦手だよ？自分は。

《別に別行動でも大丈夫じゃないですか？人格データも在りますから育てる必要もないですよ》

あ、それは良いかも、んじゃ候補ってある？

《炎の「だめ、手に負えない」。。。仕方ないですね、雷のコア元の人格を再構成しましょう、彼女は確か後方支援の技能があったはずですから》

それなら良い。。。かな？、どちらにしても自分より圧倒的に高い技量だけど元無差別焼滅最終兵器に巻き込まれる場合を考えると大分ましだ。

・・・なんであれをデバイス化できたんだろうなあ、あれ一つでも転生チートモノの能力に匹敵しかねない過剰殲滅兵器なのにそれが部品の一つ何だから。

まあ、これから別の作業が出てくるし二人と管理局の対応は彼女に任せるとしよう。

「それじゃ早速素体を作るとしますか」

相談しているうちに意識の方も回復したので雷の「リベリオン」を開放してその予備管制人格を呼び出す、黄色いコアの上に半透明の少女の姿が現れる。

茶色のロングのハーフアップでまとめた髪だけはアースを伸ばしてるように長い。

『はいはい、こちらリベリオンの予備管制人格よ、いきなりの開放ですけどどうしたのかしら？』

「雷だから風蓮司雷夢ふうれんじ らいむでよかったかな？」

『そ、雷の変換は資質より技能に近かったけど良く使ってたのはこの属性変換だからそういう風に変質したようね』

「それで、起こして早速なんだけど使い魔というか、実体化して行動してもらいたいんだ」

『それって人手が要る事なの？正直私はもう人生は謳歌し終わってるんだから現世に関るのは避けたいんだけど』

さすが予備でも管制人格、いや、だからこそかな？真っ向から嫌だと言いつたよ。

でも正直今はともかく時の庭園でのサポートは必要だし、夜天の魔道書の対処もあるからこの先協力者は必要。

「人手って言うかこれからの準備と関係プレーとかの為に今のうちに誰かは必要なんだ」

『わかったわよ、ならデバイスの使用権限を書き換えさせてもらうからね、もうリベリオンは使えないと思ってよ？』

「わかった、というよりそれ便利だけどややこしいから使いこなすのには時間かかるんだよね」

『それなら遠慮なく』

リベリオンのコアが宙に浮くと先程の少女が二十歳くらいの姿になって実体化する。

「飯の体の構成は成功ね、それじゃこれからちゃんとしたのを作るから手伝ってよ？」

自分が手伝う側なんですね？本来の主従とは対応逆なんですね？

こうして同居人が増えることになった。

S i d e : にやのは

わたしは今管理局の船に乗ってこの船のこの件についての説明を受けています。

本来ならわたしはこの件から手を引いてもらう予定だったらしいけど連れて来ていた戦力がさっきの戦闘でほとんど動けなくなったらしくてその戦力の筆頭である男の子。。。クロノくんが回復するか事件が解決するまでの間協力することになったの。

わたしもフェイトちゃんとおはなしたいしジュエルシードの回収を手伝いたかったからそれは受けることにしました。

それに、もっと強力な砲撃を、そのためのアドバイスが欲しかった。

「リンディさん、お願いがあるんです」

あの樹を撃ち抜いた朱い砲撃あかいに匹敵する一撃を放てるように。

E N D

九話（後書き）

最近ISの二次創作作品を読み漁ってます。

それで何だか電波受信したけど作る気になれないからこんなものになってのだけ。

・転生モノでも男性だと違和感あるから性転換（正確には二次のオリキャラは女性の方がしっくり来る気がするだけ）。

・蒼穹のカルマとのクロス（ある理由で装備のイメージが多少ながら重なったせい）。

と同時にオリIS？も考えてたけどまとめきれずに断念。

無理はするものじゃないね。

というわけで更新予定なんて考えずにこれからもやり続けていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8335n/>

魔法少女リリカルなのは～オリ主は中途半端にチートな魔導師？～

2011年11月16日12時49分発行